





非支考序

夫字此以支考といふ事一一人のりり
 とて、
 於るれを彌る世よと、
 此のほと、
 ぬれと、
 へと、
 くと、
 うと、



おのしめられた式をよめる
 誹言連語の
 りるあはれなれと公家殿との酒興
 雅より公卿殿と人共とあはれひりり
 卑賤のよめるひりりすまの風雅
 あはれ也又そまの法華とあひらあ
 比くちかた事れ大事とまら
 りるよめるひりり夫歌采菱
 發陽阿鄙人聽之不若此延路陽局
 士農工商よめるひりり艶詞
 醬鹽とあはれからるひりり日用
 抄子

を定規のたひあへん

我沾徳のよめるひりり異なり賤
 月雪のよめるひりり及り花鳥
 伊勢源氏物語の大條と
 めるひりり耳よめるひりり俚語鄙言
 かへるひりり目りり
 人倫のよめるひりり
 りるよめるひりり君父の命

こゝろおのりとおひ切字あく重みはりか
しと平句とつあれしわちりりた
はあぬの朝服れ如く冠袍はきろとた
切字ありり平句ハ燕居乃服のこゝろおの
朝服と従平句ハ燕居のこゝろとら
はと其若酒飲雑談とあつとありさん
棋と負つてあつとみえつとあり雑談と
あつとありあつと遇友則脩禮節辭讓
之義也

多分こゝの助言も大和純助訓も言語不倒れ

こゝ程河とんよ日本の人ハ日本ハ居ハ漢土
ハ助語とつとんも恥とつとつと推量な
んとも

和漢精通ハ人ハれとつと孔子ハ
未曾有とつと曉とつと楚昭王乃萍實
齊釐王ハ廟の災ハ

歌人も連歌師も假名と真名とつと通せられハ
不案乃とつとつと

おのれとつと通達とつとつとや醜鷄
仰甕口自謂雲漢津

けいもつかしき萬葉假名れ字と用ゆる
み及いさしん

夕方暮萬葉假名よはしひゆまられのま
い假名よてめつちひちあをそこれい
るゝの万れ字を方と心得てかたまりの夕
間暮まて埒の何らや何ら有間欲を
かたまり聞間欲あはまし淺間敷有間欲
聞間欲淺間敷と何のそはつわさか
りん此間いれ助語あはかあそか
いとあちり俗語の何らまはし

有間敷よて又あはれとるもあはす間違
ぬらちかひ也石人徒有人形耳不知好惡
御傘れ齒のそちよそちれ年乃字但數のち
そそやそい不可嫌之

此そちとかけり今答あやつあ所よ
そちの老人れ貞徳を自作自述あ人此そち
そしとして決して十年れ二字あし

年に三の音も訓もあ出度後とあれと迂遠
也そちもあそちのちのちのト三の反ち
り故なりむら

ちよあつらん十將十也十は唐音也一ち通隣
歌書をよみぬひ連歌成るとも

螻蟻撼鐵柱

歌書ハ濁りたるぬものたるまらるる
一トリグてでのこひこむる辨ぬ者ふん
ふれとらやたる無孔笛最難吹
惣ふ歌書ハ注ふつかひ太刀とく眞實ハ義ハ
あらざるぬり法なりとらふひあひの歌書ハ
注ちるぬ虚をかけり信すはとらふぬ
短綆不可以汲深井之泉然もれ温潤なり

とら何れと孫讓一ととら我おほ
くせす口さうれきものトニの反子とた
あふかぬ一故つ一といぬり法なりと
うけたるぬ

名所ハ雑の發句とら

歌書ハ雑の題雑の體はるぬとら
季節ちよ哥はよりあつぬとら
おとぬるや哥も季節ちよとら
あつ雑の題とら歌書連歌
いらふとら

二條殿二條殿の御ことより御老老御筆御筆不埒

二條様ハ二條家御歌所御歌所よりよりとしかるとしかるもも子子りりの
貞徳ハ松永彈正久秀久秀ハ叔父叔父より和漢博覽の人
あり且夫賤妨貴少陵長遠間親新聞舊小加大
淫破義所謂六逆也

今按茲の中古式目中古式目ハおほむおほむむむをを御筆御筆を始を始と
て連歌連歌の只一只一とある物物ももいいふふハ音訓音訓かりかりて
二二と三三ともともゆゆももハ連歌連歌の家家ハ制度制度よりよりいいふふ
ハ一一と二二ととももいいふふハハ旋旋ハ心得心得かかららいい

第一也

そそののいいのの乃乃式式ハ連歌連歌の漢和漢和式式とといいふふハ
いいふふハ式式とといいふふハ也貞徳老人始始て容易容易よりより
このこのいいふふハ漢和漢和の常常の連歌連歌の二二つつハ物物ハ漢
より一一和和より一一ああれれるるハとといいふふハの旋旋ハ弛弛ハおおれ
ハ一一と二二ととももいいふふハ響響ののささららハとといいふふハ也

發句脇第三

發句ハ混沌の間混沌の間よりよりおおここれれと脇脇第三第三よりよりいいふふ
ささうさああれれるることことももいいふふハ四句目四句目ハ地地乃乃數數と
以以て和合和合すと六句目六句目ハ八句め八句めも亦地亦地の數數と和

合さるるものやひ次第の物を配するところう
てのれ天一地二天三地四天五地六天七地八天九
地十

表合と三物との類ハ神祇以下れ名目とききいらす
かひてせぬことあり又百韻五十韻四十四歌仙の
外こまへとせらるものハ皆あき也

もあしとあきとせらるものハ皆あき也
てらるるものハ皆あき也

あきとせらるものハ皆あき也
あきとせらるものハ皆あき也
あきとせらるものハ皆あき也

此ふつ川ハ代々和歌集連歌俳諧其餘俗語
あきとせらるものハ皆あき也
あきとせらるものハ皆あき也
あきとせらるものハ皆あき也

春夏ハ秋冬と一句れ雑とせらるものハ皆あき也
あきとせらるものハ皆あき也
あきとせらるものハ皆あき也

夏冬ハ三句去一
五句去勿論也
月花の坐る坐るといふいりて春秋と三句つけ
る前後の配あきとせらるもの害もあれはる季ハ二句もはる
くけん也是ハ名残の裏の春二句はる古例あり
出なり

春秋の二句も決ておきなり古例より出たる
よ何々すかぬり恣より出たり名残れ裏の春
二句ハ譯あぬことなり

一孟よ山いと川の如き語路の拍子に耳よかぬ
二句以下ハ由れり

かこゆさぬことなり

野遊春秋の二季よつれぬ

節句三季よつれぬ三季よ用やハ鮎又同

此三は物こゝち雜なり

祭と鷹去嫌ハ三句よ過かす

夏冬五句去なり

鷺鷥目白頬白れ類一句はあぬハ雜とす

比白秋也鷺鷥ハ秋也

給鯉秋の一字こゝちハ秋ハ秋

夏なり

とれことなり物れ教ハ手

習れ師れハはを大きハちか

ろはと字もつてハ二

とハもことなりハ

おほえて名ハこ

あつても何れあれた物を崩してとてやれども
海もさみちひくも猶救經而引其足也

帝の人倫も二句御門の居所も三句去了

帝の天もあつても一日もたつと奉れ人倫の捌
みぬぬり古法なり紫宸清涼仁壽常寧大
極豊樂安福貞觀區宇若茲不可殫論これ
居所もあつて

老いぬるをたのむる親子を述懐と云はれり
故をぬるをす

おい衰へるありはるほとありれりるハあ

親子の情愛はつらかり子疾ひあはれん
して歎れり又家まると歎をぬれり
川をさるとえりてつら雖則如燬父母孔邇
えりつらあことやまことと云はれ船頭馬
士の鄙言もあつてなり

さつらつら串團子喰ふ馬子尻をこき
みふつらつらひも句をゆへん

此えふつらの道をもて儒門の夫子は詞もや替
て六藝れあつてつらつら

つらつら詞もつらつら士の鄙言もあつて

ものりたふふしそ六藝れありそちふあふふや猶
蟻垤之比大陵也其相去遠矣

箒れえふふこまやとまぬふい
おもふふや思ふぬかりのつれあふ

かふゆふれいあふふふふふふふふふふふふふふふ
けぬふふふからふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
たふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

天下之衆庶皆鰥寡

かれぬやふふふひー娘ふふふふふふふふふふふ
ありと世れ人ふふふふふふふふふふふふふふふ
こも白粉を施ふー燕脂を施ふー模様うち
ふふ小袖ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
いかに狂人あふふ士為知己用女為説已容
やふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
て雅言を仇讎のめふふ 華子規月雪れ
四の物ふふ艶詞ふふふふふふふふふふふふふふ
杉木兔月食大雨ふふふふふふふふふふふふ有言

於此貧賤之人過富貴之家學致富曰致富有道乎曰有之當去五賊請問其目所謂仁義禮智信也學者懼而去蓋以此四者為四賊邪

系乎驪龍領下の光をかけて四海其徳をひろめんとすれり人の大任あるや此の徳を人よ助けしめてあつて徳の徳の徳の徳の徳たるはおれつり彰々之上徳無為而無以為下徳為之而有以為

百韻の式の定りたる百餘年より過さるる後鳥羽院建保の頃定家家隆の命して百韻は

作法就

祝言哀傷の儀式より發句の作者より名残の花とこの字

發句の作者よにほひのちとこれむはあはれや也あんとは時のかさこゝろや

儀式のえいりつゝハ執筆れ肩の執筆とかくかゝるしや

發句 ぬれこれよのち岩の牡丹うお花よ ち國の遠山ささるはあまけり
これりつこゝろあまを對せしむり對せ

とつ六子規のぬりよ卯花の朧月のぬりよ雁
の朧字あまのるをくくくあせるよ川じひの喧
嘩あし

發句 七浦や一字の影を一字宛

舉句 霞の刷毛よあかる 八景

これよぬりよあまのるも是猶以足搔頭也

よひひのせ 絲櫻花一ころよさるよけり

これさるころの亂法也

よひひのせ

其の柵木よききとさるめり

ききれ居る花の賤屋とよありけり

よひひの盈れ草書かきま字あまの累はま

らまの疊柵ハ柵鳶ハ鳶文字吟味のことよひ

〜ぬと僅のらまかきれぬ抄中ハ誤字不可勝數

さるきまの坐よ一つあまのるさるぬら花の句よ

花をけり月の句よ月もつけんあれた五花九月も

六花十月ももつ新製の法式ぬらんあり眩人

吞刀吐火植瓜術皆是也

發句 ちよよの胡蝶やまぬれ魂發

みほひのむらにまぬ胡蝶とちよりの客

輪廻遠輪巨とておの似るを嫌ふも
く 輪廻もせんや參語もくれば
八月の旅おもくろく木幡道
素性り哥とてく月

此二句月として當坐の妙用神助として月と
月次の月れ作法は何の為とてあつて
くらせんくめあまいつくあつて邪神の
助りや一夕不見月雙目如失明
又隱見の法とて
姨捨の哥も誰も袖ぬれて

これら月よあふこりけりよ誰もあつて
あつていふふあつていふ流をくむるあつて
愛してそつていふりやうらむりあつてあつて
去年の嵐の賦は假名よ韻とてあつて也かあ
物も韻とてあつてあつてあつて漢和連歌に
格とてあつてこの毒を啜る者近き假名詩と
つれ物と作りあつて猶濁其源而求其清流
豈不難哉

隨意よ月花をくつてあつてあつて
かくれとてあつてあつてあつてあつて

あつとあつとあつとあつとあつと

第三の あつとあつとあつとあつとあつと 響の鈴も松虫も

錯綜顛倒の法とつひて論をいふよとつひてあつと

例れむつかふ法あつとあつとあつとあつとあつとあつと

いふ論いふよとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

くありとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

此句れ如く口舌か鼻まからあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

うとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

三足猿とあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

發句 あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと 猿の尻 あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

脇 峯の嵐も谷のあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

百世のあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

百世のあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

右れ數言くあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

想して何流彼流も、岐路おほくありて
まことすくぬきものうらまふ者達ありて
こと志らすえちく千虚とす、一實の歸
つゝ也學非本不同學非本不一而未異若此
儒佛老莊の實義を崩し詩歌連歌の荏弱を
もとめんとすればおのつら過當れ詞まけりて莊子
の洒落の風俗も似かよひて高邁虚誕のうき名
もやゆめりて

過言——こころり 蛸與鵬大椿與朝菌毛嬙麗
姬與麋鹿猴與狙公柳下惠與盜跖

うれ風羅念佛とく芭蕉庵の句も念佛とま
て都のうらまを踊まほしめありまことあり
凡師とる人其弟子の藝もまこと名もま
きと規矩あれまことまことあつてあつてあつて
まことん土下もあつてあつてあつてあつてあつて
これその祖とほつてまことあり 有誠則雖蘋蘩
鬼享之無誠則雖滋味鬼不享之而況於若人手

Handwritten text in a cursive script, likely a form of shorthand or a specific dialect, arranged in vertical columns within a rectangular frame.

江戸四日市
古今珍書
達摩堂

山



مكتبة
1000

